



## 光永星郎の生涯

1866年7月、現在の氷川町で生まれた光永星郎(幼名・喜一)は、6歳のときから、宮原の寺子屋「八木田塾」に通います。19歳のときには上京し士官学校入学を目指すも、凍傷にかかり右足の自由を失います。これにより軍人への道を断念、政治家を目指すし不平条約改正運動や国会開設促進運動に没頭します。23歳の時に「大阪公論」の嘱託職員となり、記者として働き始めます。

光永は、記者として各地を渡った経験から、報道と広告を一元化した事業を考え、35歳の時に「日本広告株式会社」を創立。光永の広告業のスタートは、東京の6畳と2畳の小さな借家から始まりました。その4ヶ月後には「電報通信社」を設立し、念願だった通信業もスタートさせます。

1905年、日本は日露戦争の勝利に沸き立ち、光永の日本広告株式会社の業績も急上昇します。1906年、40歳の光永は、通信業の経営というかねてからの夢の実現のため「株式会社日本電報通信社(電通)」を設立し、電報通信社を吸収合併させます。光永は、社屋を新築し、「朝がけ、屋がけ、夜がけ」を実践して電通を育

て上げ、政党や官僚の助けを借りず、広告主と新聞社へのサービスをモットーに自主的経営に努めます。私設専用線、同時電話の架設、電送写真機などを備えて、通信の機械化、飛行機の利用などによって通信配給を独占し、電通を一大企業にします。

1923年2月、電通は社長制を導入し、創業者である光永は初代社長に就任します。それまで社長をおかなかつたのは、設立当初の数多くの協力者への、光永の敬意の表れでした。同年9月、関東大震災で本社屋が被災した時は、「何倍にもして返して見せるぞ!」と叫び、不屈の闘志をたざらせます。

1933年、光永は当時の最高建築である電通本社新社屋を東京のど真ん中に建設します。同年、貴族院勅選議員に通信界から初めて選出されます。1936年、国策によって電通の通信部門は「同盟通信社」に合流。

1940年に、光永は辞意を表明し、電通の社長を弟の光永眞三に託し、自身は顧問としてサポートします。また同年、宮原小学校の児童に「健・根・信」を説き、学校の門と塀を寄贈します。1945年2月、光永は78歳で激動の生涯に幕を降ろしました。

## 氷川町の偉人を知る

### 広告の先駆者

みつなご  
**光永**  
ほしお  
**星郎**

1866~1945

氷川町出身。日清戦争では従軍記者として朝鮮に渡り、その経験から1901年に現「株式会社電通」の前身となる「日本広告株式会社」と「電報通信社」を設立。のちに「株式会社日本電報通信社」とし、広告・通信業の近代化に尽力。雅号「八火」。

世界有数の広告会社となった「株式会社電通」のはじまりは、現在の東京都中央区銀座にあったわずか8畳程度の借家でした。光永は、35歳の時にこの場所からスタートし、広告業界の先駆者として時代を駆け抜けました。

## 郷里で説いた教え

八火先生(光永星郎の雅号「八火」にちなむ)は、東京で一大企業の社長になっても、旧恩を決して忘れることはなく、故郷の後進たちのために施設を寄贈したり、自らの教えを説くなど、故郷への恩返しを欠かしませんでした。

前述したように八火先生は宮原小学校に門と塀を寄贈しました。また、1973年、彼が創業した電通の70周年記念事業の一つとして、宮原町に「八火会館」が寄贈されています。八火会館は、2015年、施設の老朽化に伴い、図書館と振興局の機能を持った複合施設となりました。施設内には彼の功績を顕彰するため、「八火ギャラリー」が設けられ、彼の足跡をたどることができます。



▲ 旧八火会館



▲ 現在の宮原振興局・八火図書館



▲ 八火先生直筆の「健・根・信」

八火先生の信条である「健・根・信」は、彼の生き方を表した言葉でした。彼は、若くして右足が不自由になっても富士登山を行うなど健康であろうとし、どんな時も根気強く生き抜き、世話になった人たちに對して恩を忘れない真面目な信義の人でした。八火先生は「健・根・信」の精神を故郷の子どもたちに説き、この精神は今でも氷川町の人々に脈々と受け継がれています。

氷川町では、八火先生の命日である2月20日前後に、八火精神の継承と町民の読書活動の推進を図ることを目的に、毎年「八火図書館本まつり」が開催されています。

## 本まつり

今年2月7日に氷川町公民館で開催され、読書感想文・感想画の表彰のほか、人形劇が行われるなど芸術文化に触れる貴重な時間となりました。

## 町のブランディング

光永星郎氏が生まれて160年の節目である今年、彼の生涯とその精神をつなぐ本まつりについて紹介しました。氷川町では、「広告の先駆者」として日本をリードした彼に倣い、今後は新たなブランドマークとともに、これまで以上に町外へ魅力発信していきます。

昨年10月にできた町の新たなブランドマークは、町の理念やイメージを表現する大切なシンボルです。このマークは特産物やイベントをはじめ、さまざまな場面で使用できますので、ぜひご活用ください。

## 第52回 八火図書館本まつりの模様



▲ 読書感想文を発表する  
上田 真大さん (竜北中1年)



▲ 読書感想文を発表する  
宮原 優さん (竜北西部小5年)



▲ 挨拶を述べる八火図書館館長の松本 友喜さん



▲ 劇団ぱれっとによる人形劇「赤ずきん」

しあわせが、  
そろってる。  
**氷川町**

▲ 町の新たなブランドマーク

※ブランドマークには使用規程があります。  
詳しくは企画財政課までご相談ください。☎0965-52-5850